kai

ISSN 0911-5587

楷

岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN

NO. 21

1995
MARCH

中央図書館の現状と課題

― 退任にあたって ―

好 並 隆 司

はじめに

館長就任以来、早くも２年間が経過しようとしています．大学図書館は今、国際化の中での情報をどのように速く、多量に入手するかという、いわゆる電子図書館としての機能を求められていると同時に、図書数の増大・職員の充足という旧来からの目標達成もまた、緊急の課題となっています．館長職はこの要請に応える力量を内外から求められていると思われます．

館長の職は日本の大学の場合、必ずしも明確に規定されてはいません．選任については学長の選任するものと評議会のそれとがほぼ同率です．さらに館長専任制と兼任制については前者が形式的に決められながら、実質は後者が通常の制度となっています．任期についても２年から４年までの幅があります．

岡山大学の場合は各学部推薦の上で学長が選任するものとなっており、部局長経験者が望ましいという慣例です．上記の各々については一長一短があり議論の分かれるところですが、私の経験では兼任制によって、大学の情報中心としての図書館の財政や人員の充実を全学的に求めることができる点で長所もあるかと思います．

図書館の機能について

ところで、任期の中で従来から、概算要求をしてきた新営約8600㎡（予定）が今年中に第一次の建築が始まるでしょうが、完成の暁には図書館機能が飛躍的に発展するものと期待いたしております．新棟では電子化による情報サービスの発展はもちろんですが、教育改革の中で学生が研究・学習に能力をフルに発揮できるような環境を整備していくことが極めて重要であろうと思います．また学内外の研究者が情報を速やかにかつ多量に入手できるよう、総合情報処理センターと協力しながら、一層の整備の向上に務めなければならないと思います．そのためには多くの財源と人材が必要です．文部省等に積極的に働きかけていかなくてはならないでしょうが、岡山大学各学部のより一層の御協力を願わなくてはなりません．金沢大学等のいわゆる“旧六”の大学に比して本学の図書館の予算は、なお劣っているような現状であることも皆さんに認識していただきたいと思います．

次に選書についてですが、選定者が図書館長で、館員や研究者の協力を得て行う場合と研究者が独立して選書するか、図書委員会を設けて行う場合とがあります．本学では概ね後者で共通図書・参考図書などの名目によって研究者が選定し、委員会で審議する形を採っています．この点の短所は個別的な選書には有効ですが、各学部にわたる性質の図書を購入するのが難しく、大学図書館において基本的に備うべき著作物の選書がやりにくいということがあります．この点は将来、図書館独自の選書の組織を工夫し作ったらどうかと提案しておきます．

図書館サービスについて

図書館利用者のサービスについては学内の教職員・学生はいうまでもありませんが、一般にも開放する方向が望ましいにしても、大学図書館の機能を果たせなくなるような利用はやはり制限せざるを得ないでしょう．特に地域住民への公開の場合は夜間開館も必要になってきますし、その場合職員の負担について考えなくてはなりません．入・退館について本学図書館では荷物置き場を設けていた従来と異なり、鞄等の持込みを許可したので、事故防止装置を設けました．しかし、それに抵触する学生も少なくないので学生諸君に倫理的な自己規制を求めたいと思います．なお開館時間については要望もあって夜21時まで、と従来より一時間延長しましたし、自然系の雑誌閲覧については教員に限り、24時間の開放（自動装置）を行いました．このことは情報入手の緊急性に応えるもので、研究者の利用に便利だと好評を得ました．

職員の専門性について

図書館の運営の中心は館員であることはいうまでもありませんが、そのうち司書の有資格者である専門職員と一般職員があります．専門職員でないと利用者のサービスが難しい場合と一般職員でもできる業務も館運営にはあります．図書館の近代化に対応して専門職員の数は増加傾向にあります．この二つの職種は、ある点では図書館運営上必要不可欠ですが、人事運用に関してはポストの数が決まっていることもあって、職員の活性化を計る上でいささかネックになっているのではないかと感じました．図書館についてはまさに金と人とが肝要ですので、その配分を一層強く要請する必要があります．

新館について

今年７月頃から図書館増築が実施されることは既述しましたが、このことについて次期館長はじめ職員の方々に希望を申し述べておきたいと思います．まず建築担当者と図書館側の協力によって、館の規模と内容に関する案を充分に練り上げることが肝要でしょう．既に本増築部分に関しては青写真ができていますが、館の機能面がこれでよいかどうかを改めて検討し、研究・教育にとって必要な施設を十分に備えるようにしたいものです．そのために各パートに属する図書館員の要望を集め、これを総合的に館長・事務部長が判断して適切な設備を企画することが大切であろうと思います．

おわりに

最後になりましたが、岡山大学全体の中での大学図書館の自己評価についてふれておきます．これは大学図書館が現状より一層有用で機能を果たせるようにするために調査を行い、然るのち評価するということです．従って蔵書・サービス・館員の配置などが対象になります．蔵書については収集の少ない分野を埋める計画はたてられているかどうか、逐次刊行物は網羅されているか、マイクロ資料は充実しているか、視聴覚資料の充実程度はどうかなどの事項が考えられます．その他、本学図書館で早急の措置を要する点は多々あります．一、二例をあげますと、所蔵されている資料の内、未入力のものについてオンライン検索が可能になるよう遡及入力しなければなりませんし、多くの方々からの要望があるのですが、学内LAN経由のCCODの検索がMacとIBM系でも検索可能な状態に機能を整備していく必要がある等です．

これらの実施、実現のためには繰り返しますが、より多額の予算と人員の配備が必要です．ただ現在の状況からみるとその望みはなかなか叶えられそうにもありません．しかし新年度以降、館長を筆頭として館全体で具体的な方向を模索していただきたいと思います．２年間は本当にあっという間だったような気がしていますが、充分皆さんの期待に沿えなかったことを自己点検し反省しています．終わりに皆様方のご健勝を祈念しまして擱筆させていただきます．

（よしなみ・たかし　附属図書館長）

思いつくままに

—退任にあたって—

森　昭胤

私が医学図書館らしい所を最初に利用したというと、1965年の初め、マイアミ大学に留学していた頃になります．マイアミ大学は1925年の創立でメイン・キャンパスには立派な図書館がありましたが、30年前の記憶に残っている医学図書館は研究棟の１階で、それほど大きなものではありませんでした．しかし、当時日本から行って嬉しかったことは、ゼロックスコピーサービスがあったことです．今では想像もつかないことでしょうが、30年

前の日本では玩具の写真機のような、数分間待って紫褐色の紙に文字が出てくるようなコピー機を使っていた頃でした．こんなことを知っている人は皆、退職の時期にきているわけです．

その頃からみると日本のどの大学の図書館も非常に近代化しました．鹿田分館も蔵書数や外観、また最近ではCD-ROMの導入による高度情報化への対応など欧米の医学図書館と比べて決して遜色あるものではないと思います．しかし、それでも私の想い出の小さな医学図書館と比べて欠けているものに気付きました．一つは医学図書館が24時間開館していたことです．緊急の手術があるのでしょうか、深夜に文献を漁る白衣姿をよく見かけました．もう一つは看護婦さんの姿を多く見かけたことです．鹿田分館ではあまり見かけませんね．

さて、図書館に期待することは沢山ありますが、古い本が揃っているということはすばらしいことです．鹿田分館は、その点では、日本では素敵な図書館の一つと思っています．私の研究で例を挙げますと、グアニジンの研究の歴史を調べていたとき、ドイツ化学会誌 "Berichte der Deutschen Chemischen Gesellschaft" が第1巻（1868年）から揃っていて、その第1巻に当時のドイツ化学会会長 A.W. ホフマン教授（アミン類研究の開祖）が 'Zur Kenntniss des Guanidins'（グアニジンについての知見）を記載しているのを見いだして感激しました．ホフマン教授は六高生の頃、山岡先生の講義に繰り返し出てきた名前ではありませんか．

その頃、奥の書庫に入って、1900年代初期の "Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem." など、懐かしい名の雑誌の中から、グアニジンの化学や生理学の文献を漁りました．そしてもう少し、グアニジンの原点、すなわち誰がグアニジンを発見したかを知りたくなり、最終的には当時フランス大学教授であったマダム・ロバンの手をわずらわせ、ソルボンヌ大学図書館で見いだしたのが "Annalen der Chemie und Pharmacie" 118巻（1861年）の A. シュトレカーの論文でした．ついでに申し上げると、グアニジンの語源は海鳥の糞化石（グアノ）を石灰乳で熱して得たものがグアニン（核酸の塩基）．そのグアニンを特殊な方法で分解して得たのがグアニジンです．図書館にとって古い本が沢山あることは、何にも変え難い貴重な宝であり、大きな誇りであると信じています．

医学図書館ということで、もう一つ感じたこと、それは、それぞれの大学で、何か特徴があってもよいのではないかということです．例えば、アリゾナ大学の図書館では毒物学に関する文献がすべて集まっており、世界中どこからでも、24時間体制で、担当の専門家が対応してくれます．大学のあるアリゾナ州ツーソン周辺では、いまだにサソリなどの毒虫が住居内に侵入して、人やペットを咬んだりするので、そのような情報センターができたのかどうかは知りません．しかし、とても重宝と思われますので、日本の大学でも、脳疾患あるいは肝疾患とか、癌とか、長寿科学とか、いろいろあるでしょうが、その研究領域なら、どこか特定の大学の図書館に頼めば、何年前の文献でも直ちに引き出すことができるようになったらと思うことがあります．

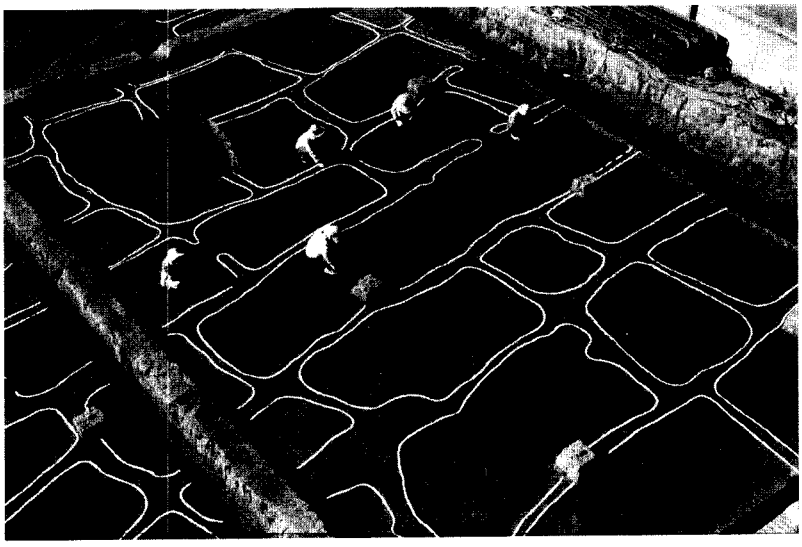
昨年5月、東京で開催された日本医学図書館協会の総会の席で、将来の医学図書館の在り方として、附属病院の患者さんの診療に関係する情報の収集や提供、あるいは医学教育のための資料の作成などを提案された方がありました．そのような課題も医学図書館としては重要なことだと痛感しました．しかし、冒頭で述べた24時間サービスと同様、現在の

図書館の人員構成と予算では、とうてい及びもつかぬことです．

文部省は最近、最先端科学研究に対して、色々の形で、億円単位の助成を行うようになりわれわれ研究者に大きな希望を与えてくれています．そのような最先端科学研究には、常に情報収集が深く係わっていることも理解していただき、最先端医学研究に必要な図書館活動を遂行するにふさわしい定員増と予算化が実現することを切望しています．

最後に少し良い話．鹿田分館の２階に "Acta Medica Okayama" の編集室がありますが、最近（1993年度）の "Journal Citation Reports" を見ると、日本の大学が出版している医学会誌で Impact Factor がついているのは "Acta Medica Okayama" と東北大学医学部の "Tohoku J. Exp. Med." の２誌のみです．いずれも0.2代の点数ですが、世界へ向けて、ささやかながらも、新しい情報を発信していることは事実です．これまで "Acta Medica Okayama" を支えてこられたヒビさん、小坂さん、また最近のレベルアップにご尽力くださっているランドルフさんや編集委員の方々に心から感謝するとともに、この小さな芽が大きく育ち、近い将来、大輪の花を咲かせることをお祈りしています．

（もり・あきたね　鹿田分館長）



発掘された弥生時代初期水田址

平成６年３～11月、中央図書館北側の図書館新築予定地で埋蔵文化財調査が実施されました．津島キャンパスを東西に横切る大規模な平安時代の大溝（幅10数ｍ、深さ１ｍ）に続いて、弥生時代の溝の底から、土器に混じって巨大な木材や精巧な木製の農具・鎧が出土、そのほか稲作開始当時の弥生時代初期水田や縄文時代の炉跡なども発見されました．

史料館完成にあたって

本　吉　總　男

この度，資源生物科学研究所分館、『史料館』が無事完成し、平成７年１月５日から開館いたしております．１階には、新着雑誌・貴重書展示コーナー等を設け、２階に主要雑誌のバックナンバーを集中化し、３階にはワークステーションを設置しました．

史料館の沿革

当館は、財団法人大原農業研究所の図書館を引き継いだものです．前大原農業研究所の図書館は大正10年(1921)にコンクリート煉瓦建延310㎡の書庫と木造平屋建60㎡の閲覧室、それに製本室を併置した図書館として発足しました．その後、建物の増改築が行なわれ、現在は史料館（677㎡）と雑誌書庫（652㎡）及び図書書庫（167㎡）の、資源生物関係では有数の図書館となりました．

資料収集の努力

広く研究成果を公表する目的から研究所創設以来、学術論文（原著）を掲載した和文及び欧文雑誌を発刊し、積極的な国内外交換を通じて資料の収集を計ってきました．受け入れた中には我が国唯一の資料や、貴重な図書・雑誌も含まれており、全国的に広く利用されています．

貴重書のコレクション

当史料館は貴重書を多数所蔵しており、その中の数点を１階の貴重書展示コーナーに陳列しています．

○ペッファー文庫

ドイツのライプチヒ大学教授（植物生理学）Pfeffer, Willhelm（ウィルヘルム・ペッファー）博士（1845～1920）の旧蔵書11,730冊です．大原農業研究所の創設者、大原孫三郎氏が購入したもので、植物学関係の歴史的に貴重なコレクションです．

○大原漢籍文庫

大原孫三郎氏が大正12年（1923)、当時の大原農業研究所所員である西門義一博士、同嘱託松本圭一両氏を中国に派遣し、収集させた中国農書4,838冊のコレクションです．

○大原農書文庫

大正10～13年頃、大原孫三郎氏が日本の農業に関する図書を網羅的に収集させた農書のコレクションで、主として近世期の和装本からなる2,576冊（782点）です．

史料館の現状と今後の課題

(1)　貴重書について

現在，補修・マイクロ化を進めており，これが完成すればマイクロリーダー等を導入し、全国の方々に利用していただきたいと思っています．

(2) 国際化について

当研究所も他機関同様毎年外国から研究者を迎え入れており、史料館も施設面、資料面及びサービス面をさらに充実させていきたいと思っています.

(3) 市民開放について

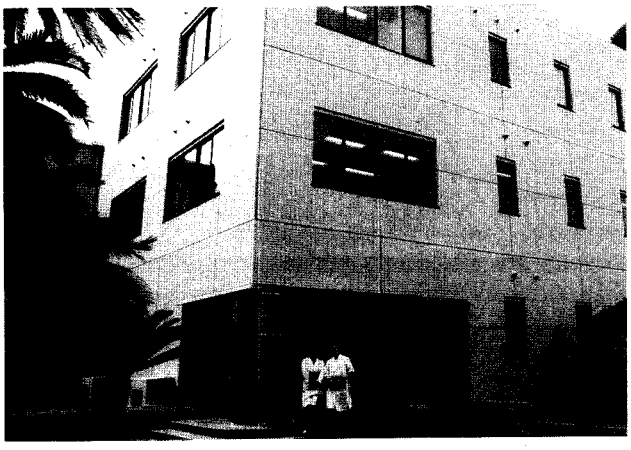
従来、来館された方はノートに名前を記入してもらい、自由に利用していただいてきましたが、生涯学習が大変盛んになってきている現状をふまえ、当館も市民の方々へのPR活動を行っていこうと思っています.

また、積極的に様々な援助を行い身障者の人にも気軽に利用してもらえるようにしていきたいと思っています.

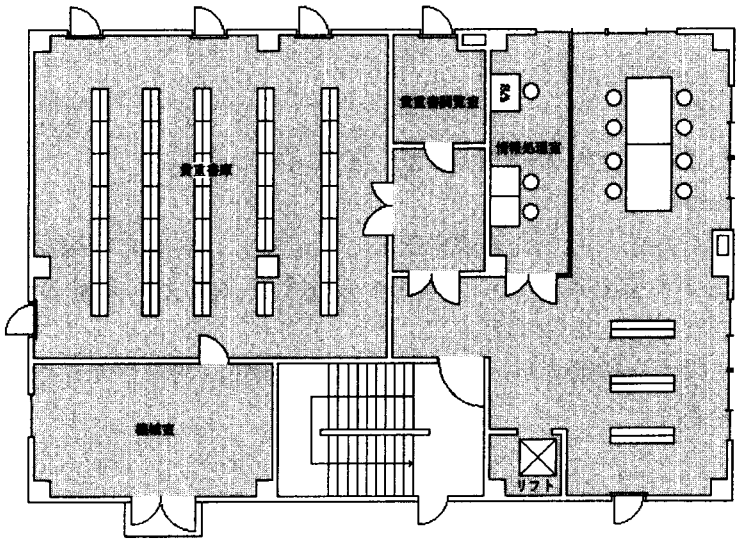
最後に

史料館では、今後も多方面からのご意見を取り入れ、古い貴重書を有する一方で最新情報を扱う電子図書館をも目指していくと共に、さらに研究所に蓄積された諸情報を礎とした情報発信基地としての地歩を固めていきたいと思っています.

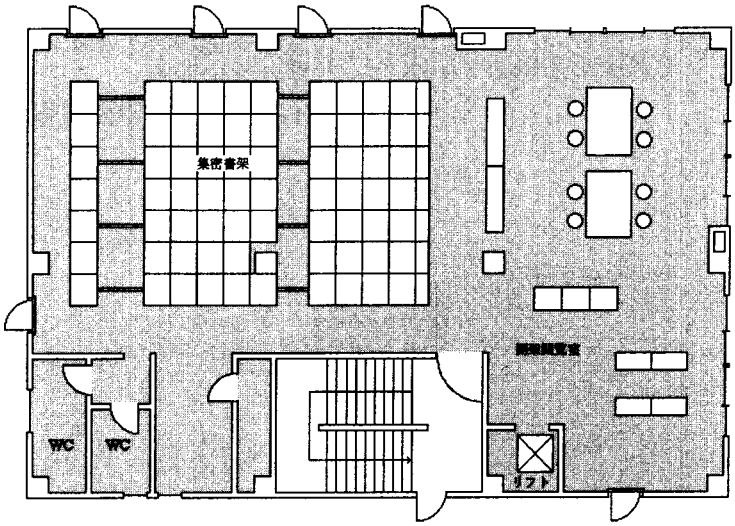
(もとよし・ふさお　資源生物科学研究所分館長)



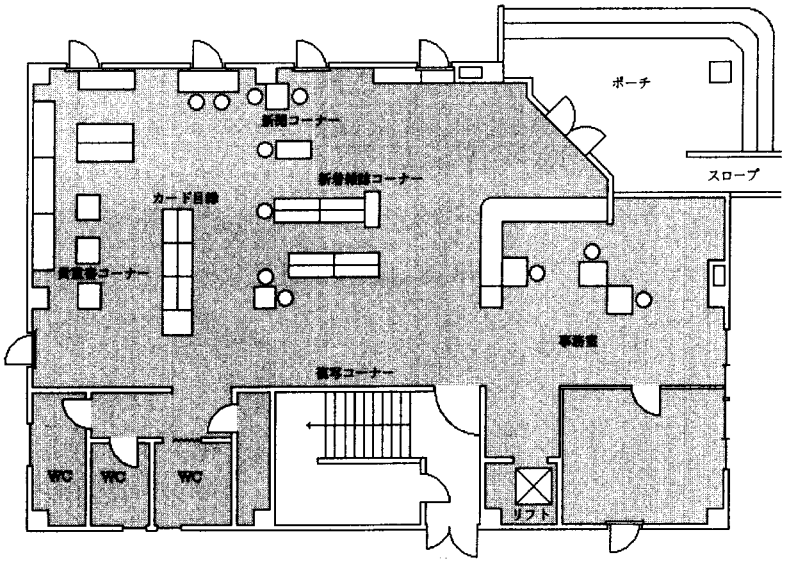
3F



2F



1F



資生研「史料館」のフロア平面図

図書館とMEDLINEとインターネット

金澤　浩

大学の二つの知の集積地

大学で研究を志すものにとって、いかなる分野においてもその分野の知識と知恵について世界の最先端に立つべきことは、当面の最低の命題であり、一方でまた永遠の命題である．別の言葉でこれは、創造と言い表されている．この活動は、既知の知識と知恵をすべて知らなければ成り立たないのは、言を待たない．この既知の知識と知恵の集積地が図書館である．従って、図書館は研究者にはなくてはならないものであることも自明であろう．しかし、自分の歴史を見てみると、学生の頃に比べて図書館の重要性は低下している．それは図書館に集積される知識と知恵が古いためである．

研究者には自明のことだが、最新の研究雑誌にある一つの論文の内容は、その著者である研究者のほぼ2年前の知識と知恵の集大成である．論文を構想し、執筆し、出版するのにそれだけの時間がかかっている．従って、その内容を元に研究を進めていては永遠に最先端にたどり着けないことになる．もしその論文を参考にするにしても、われわれは、遅れた2年間を取り戻すために、思考と実験に最大限の努力を払わなければならない．

従って、研究者の知識と知恵の情報収集の場として、学会やシンポジウムなどの集会は決定的に重要なものとなる．また先端的な研究室ではpreprintとよばれる投稿原稿を世界の研究者と交換し、それを元に研究を進めていることは良く知られた事実である．そして、必然的にその先端的な知の集積地は大学の一つ一つの研究室と、そこに集う教師や学生の頭脳のなかに存在する．

図書館と研究室の悩み

さて、昨年一年間に図書館に一度も足を踏み入れていない教官はかなりいるのではないだろうか．知の最先端にたつために、過去のすべてを知らなければならない研究者にとって、これは不可思議なことである．これは大学の一方の知の集積地である各研究室が、本来図書館に期待すべきことを自前でしているためである．それは、先述のように、図書館の知の集積内容が古いことに加えて、その集積の実体が網羅的でないこと、また物理的に離れているからやむをえず研究室が知の収集を独自にしているのである．知の最先端に立つという大学の普遍的営みが、今日のようにそのスピードを加速しているなかで、図書館で研究者が知の収集をするのは、これまで述べた理由で非効率になっている．

一方で、加速度的に増え続ける知識と知恵に研究室がこれまでの仕方では対応できないことも現実である．図書館とは、古典を収集する場という考えはあるかもしれない．しかし、図書館はこのままでは活発な研究者から見放されてしまう．一方で、活発な研究者の独自の知の収集も、知の集積の速さと広がりにおいて限界に達している．研究室のファイル保管庫が文献のコピーで埋め尽くされているのは私ばかりではないであろう．知の集積の組織としての図書館の重要性がますます増しているのである．

このような閉塞的な状況はすでに10年以上にわたって大学の研究者と図書館の悩みであ

った．これは、図書館の面積や大きさなどの問題以上に、新たな知の時代において図書館はどのような役割を有するのかという点で、また研究者の知的活動の支援をどのように行うのかという点で本質的な問題であるといえる．

一つの考え方として図書館は大学における膨大な先端的な知の集積地である個別の研究室と連携しそれを組織化する事により、大学における古典と先端を網羅した真の知識の集積地として復活することがあげられる．これは個別の研究室に散逸してしまった本来図書館にあるべき図書の回収などという末梢事ではない．しかし、一方で極めて多数の個別の研究室の情報を集めることは不可能という問題がある．

MEDLINEの利用と図書館の新たな可能性

こうした悩みに対して、一条の光が最近入って来た．大学内ネットワークを用いた図書館内の文献データベースの各研究室における使用可能のニュースである．私のまわりの人々はこの報に極めて喜んでいる．大学院生や学部学生も喜々として、自分の研究に関連した文献をこれを用いて手に入れている．

私の所属する分子生物学、医学、遺伝子工学、バイオテクノロジーの文献は、MEDLINEと呼ばれる米国で製作されたデータベースにほぼすべて盛り込まれ、コンパクトディスクとして図書館のサーバーコンピューターに存在する．われわれは24時間この中から、好きな時に好きなだけ必要とする情報をとりだすことができる．MEDLINEの詳細については述べないが、論文要旨まで入手できる．問題点は、入力データが3カ月程前のものであること、CD-ROMが届くのに時間を1ケ月程要していること、サーバーの速さが遅いことなどであろう．しかし、いずれにしても、先述の悩みのうち、図書館が物理的に遠いこと、内容が網羅的でないことなどはにわかに解消しそうになってきたのである．

この変革が、パーソナルコンピューターとネットワークとデータベースという、従来の図書館サービスとは全く形態を変えた点が注目される．そして私が提案する図書館の真の復活もこの革命的手法と技術が不可欠であると感ぜられる．その意味において、図書館と総合情報処理センターは、補完しあって新しい情報図書館になる必要があるのではなかろうか．

図書館とインターネット

こう考えていた私に昨年12月中頃に大事件がおこった．先頃完成したイーサネットを通じて、インターネットに接続し、世界のあらゆる種類の情報を、自分の机の上のパソコンで瞬時に取り入れることができるようになったことである．米国ワシントンの本家のMEDLINEに手許から瞬時にアクセスし、最新版の情報をひきだせるのである．これは正しく革命である．ローカルに、知の集積場所を完備する必要はなくなったのである．この出来事に対して図書館はどう対処するのだろうか．

答えの一つは岡山大学固有の知の発信源になることである．岡山大学図書館のみで収蔵する古文書などはその最たるものである．一方、現在の研究室の知的活動の状況も最も重要な内容である．ここでそのデータ収集方法に関する詳細な議論をするつもりはない．しかし、これまで不可能であった研究室と図書館とのリアルタイムの双方向接続の手段が手

に入った現在、単に図書館からデータを引きだすだけでなく、知の集積地である研究室はその最新の重要情報を図書館に送り出し、これをプールし利用することが大事ではなかろうか.

この情報は、論文などにまとめられるものより、もっと新しいものである必要がある. 新しい情報、新しい事実、新しい知識は、間違っているリスクは大きいかもしれない. たしかに、これまでの図書館が、最低でも2年を要する紙に書かれた知の情報の集積地であったうちは、間違いは許されないものだったであろう. しかし、昨今の知的活動の早さは、小さな間違いをのみこんでしまう大きな力をもっている.

インターネットがこのリアルタイムの知的活動を支える新たな知の集積地となることは必至である. 事実、物理学のある分野では紙の雑誌にかわるインターネットジャーナルをすでに発行していることが報ぜられた. 図書館は総合情報処理センターと連携し、この流れの一翼を担うことが必要ではなかろうか.大学に集う人々の情報図書館確立に向けての、英知が問われている.

(かなざわ・ひろし　工学部教授)

CD-ROMサーバーシステムを使ってみて

増　田　和　文

岡山大学附属図書館では、1994年10月よりCD-ROMサーバーシステムによるデータベース検索サービスを開始、LANを通じて各部局の手元のパソコンから利用が可能となっている. 薬学部では、ネットワーク利用についての関心も高くいち早くLANを導入しており、現在多くの研究室でCD-ROMサーバーシステムのMEDLINE, CCODを利用している. ここでは一利用者としてこのサーバーシステムを使ってみた感想を述べさせていただく.

確かに便利になった

雨の日に図書館まで出かけて検索することを思えば、随分と便利になった. 何しろ目の前のパソコンから図書館と全く同じ画面、環境で検索できるのだからネットワーク様々である. おまけにサービスは24時間、知りたい時いつでも調べることができる. もちろん、利用者への課金もない上、検索システムそのものは商用に開発されているだけあって使いやすい. とにかく、このシステムを利用しない手はないのだ. ただ、時計台といちょう並木をながめながらの散歩は多少減ることにはなるだろうが……

本当にいいことずくめ?

CD-ROMサーバーに接続できた人にとっては、結構使えるシステムであることには違い

ない．だが、その接続までこぎつけるのにかなり手間がかかる場合もある．Macintoshの場合は、なんらソフトの設定を変更することなくそのまま利用できるが、ＤＯＳマシン（PC98シリーズ、IBM PC/AT互換機）の場合は、インターフェースボードが多くのメーカーから出ており、それぞれの専用ドライバーソフト用に通信ソフトを設定しなければならないのである．この問題をなんとか解決して接続できたとしよう．しかし、自分の目的とするデータが必ず利用できるとは限らない．なぜか？　１つのデータを同時に検索できるのは10台まで、CCOD（Current Contents On Diskette）に至っては３台までであるため、込み合っている時は検索もままならない.岡山大学の教職員数・学生数に比べこの制限は、かなり厳しいものと言わざるを得ないだろう．

将来こうなれば

今のところ、Macintosh，IBM PC/AT互換機でCCODの利用はできない．Macをよく利用する研究室は多いので、この辺改善の余地がある．また、同時に利用できる上限の引き上げは急務であろう．さらにシステムを現在のNet Wareによる接続から、TCP/IPによるIP接続にできれば、パソコン、ワークステーションを問わず手軽にtelnetで通信でき、インターネットを通じた学外からの利用も可能となり、ますます利用しやすいシステムになるものと思う．

しかし、現システムの充実や新システムの導入にはわれわれができるだけこのシステムを活用し、多くの利用者にとってなくてはならないものであるという「実績」をつくっていくことも大切である．

以上、CD-ROMサーバーシステムを使ってみての率直な感想を拙文ながら述べさせていただいたが、いずれにしろ現在の私が、このシステムの恩恵に十分あずかっていることには変わりない．

（ますだ・かずふみ　薬学部助手）

もう“電話帳”はめくらない

山　口　裕　幸

PsycLITがCD-ROMサーバーで利用できるようになるまで

PsycLITのCD-ROM購入は、教育学部の先生方からのご提案に全学の心理学関係教官が賛同して実現したものです．さらに、附属図書館のご協力によってサーバーに搭載され、研究室のパソコンから縦横無尽の文献検索を行えるようになりました．効率的な研究推進を強力にサポートしてくれるこのシステムに感謝しています．

それまでの文献検索って…

私の場合、昨年までは別名電話帳と呼ばれる滅茶苦茶分厚い "Psychological Abstracts" をめくりながら文献を検索していました．学部4回生の頃から院生時代を経てずっと慣れ親しんできた作業ですが、日に日に忙しさが増してくる中で、この文献検索に費やさねばならないエネルギーと時間にもったいなさを感じるようになっていました．DIALOG検索も利用してみましたが、さまざまなキーワードの組み合わせを行いながら柔軟に（わがままに？）検索を行いたいときには物足りなさが残るのを否めませんでした．

研究を進めるうえで不可欠ではあるけれど必ずしも本質とはいえない．しかし、精密でなければならない文献検索作業は気の重いものでした．

PsycLITのCD-ROMは，学会の研究器材の展示ブースで以前から見かけていて、「あれがあればなあ」と思っていましたが、高価なのであきらめていました．関係の方々のご尽力によって活用できることになって、改めてその素晴らしさを実感しています．

どんな風に利用しているか

私は研究室ではもっぱらMacintoshを使用しており、EtherTalkを介してOUnetおよびINTERNETへと入り込んでいます．

PsycLITを使うにはAppleShareを立ち上げて、LIBRARYゾーンを開き、CD-ROM群の中からPLA4とPLC4の2つを選択します．デスクトップに表示されるCD-ROMのGUIはとても美しくて初めは見とれてしまいました．あとは検索ソフトMacSPIRSを起動して検索を行います．投入する言葉は心理学のThesaurusから選択したキーワードや研究者名を用いることがほとんどです．

初めて使用したときすばやく検索が行われるのを目の当たりにして、「去年までの電話帳めくりは一体何だったんだ」という思いと、あの苦行から逃れられるという開放感が交錯したのを思い出します．

最近では慣れてきて、自分の研究テーマにそった学術論文を検索するときはもちろん、演習の授業で使用する論文を選択するとき、あるいは卒論や修論、学部の実習授業の際に、学生に参考となる論文を教えてあげるときなどにも気軽に利用しています．

将来に期待すること

ミシガン大学に行ったとき、大学のあちこちに情報検索用の端末が設置されていて、さまざまなデータベースに軽快にアクセスできるのに驚きました．

岡山大学で現在サーバーに搭載されているもの以外にも国会図書館の蔵書のCD-ROM等、頻繁にアクセスしたいものがたくさんありますし、PEACHやMUSCATも同じ手順で検索できたらと思います．

より多くのデータベースやCD-ROMに誰でも気軽にアクセスできるようなシステムができあがる日が、遠からず岡山大学にも訪れることを期待しています．

（やまぐち・ひろゆき　文学部助教授）

マスカット

CD-ROMサーバーの利用申請スタート

『楷』No. 20でご案内のとおり附属図書館では平成6年10月からCD-ROMサーバーによるサービスを開始しました．提供しているデータベースはMEDLINE・PsycLIT・ERIC・MLA及びCCOD（ディスケット版）です．平成6年2月末現在の利用申請状況は、利用者ID登録数73件、接続端末数126件です．

中央館情報検索コーナーのCD-ROMの利用激増

中央図書館2F情報検索コーナーでは、今年度からCD-ROM用パソコンが計5台に増え、また、サーバーシステム導入により、今まで一度に1人しか検索できなかったMEDLINE、PsycLIT、MLA、ERICの4種類が同時に検索できるようになりました．

平成6年度の利用は2月末現在計1,273件、このうちサーバーシステムによる検索は1,031件で、その内訳はMEDLINE 631件、PsycLIT 159件、ERIC 78件、MLA 43件、CCOD 120件となっています．またそれ以外のスタンドアロンによる検索件数は242件で、Global Books in Print Plus 62件、HIASK 48件などが多くを占めています．

池田家文庫マイクロフィルムの活用状況

平成4年度に完成した池田家文庫藩政史料のマイクロフィルム（全2,486リール）の利用は学外者の来館によるものが多く、全面的にサービスを始めた平成5年度の利用は延べ271人、1,276リール、コピー枚数21,526枚でした．平成6年度は2月末現在延べ197人、728リール、コピー枚数13,095枚で、4～5月の臨時休館などにより減少しています．

資生研「史料館」オープン、一般市民に公開

平成6年3月8日に着工した資源生物科学研究所分館の新しい建物が10月31日竣工しました．大原孫三郎氏の収集による3つの貴重書文庫（約2万冊）の特色を生かし、新たに「史料館」の名称のもとに平成7年1月5日オープンし、一般市民に公開されています．1月20日には、資源生物科学研究所の創設80周年記念式典等が行われ、研究所内の施設が披露されましたが、史料館では大原農業生物研究所時代の写真や貴重書を常設展示しており、多数の学内外の関係者が訪れました．

ILLシステムを利用してBLDSCへ文献複写依頼

当館では平成6年度、NACSIS-ILLからBLDSC (British Library Document Supply Centre) へのオンラインによる直接依頼を開始しました．

阪神大震災による被災大学生へ貸出サービス

当館では阪神大震災により被災した神戸大学、神戸商船大学の学生の利用について、本学の学生と同様、貸出サービスを行っています．2月末現在43人の学生が利用しています．

分館の係名を変更

平成6年10月1日付で、鹿田分館および資源生物科学研究所分館の係名が、これまでの受入係から情報管理係に、閲覧係から情報サービス係に変更されました．

「池田家文庫藩政史料データベース」「諸職交替データベース」をパソコンで公開

すでに『楷』や『図書館概要』などでご案内してきましたが、附属図書館では平成元～3年にかけて実施した池田家文庫藩政史料マイクロ化事業に伴い、自動検索仕様の16mmマイクロフィルムに対応した『池田家文庫マイクロ版史料目録』を丸善から出版しました．

これには2種類あり、昭和45年に刊行された『池田家文庫総目録』を基本データにしたリールガイド版のほかに、総記、国事維新、藩士、法制（行政のうち誓詞を含む）の分野については、改訂増補版が出版されました．この度これらの目録情報をパソコンデータベースとして2Fの情報検索コーナーで公開する運びとなりました．コマンドや利用マニュアルのいらない検索のやさしさが特徴です．

「諸職交替」は岡山藩政史料の一つで、75の職種別に江戸全期にわたって更迭が記録され、職制の体系と家臣のうち「平士」以上の藩士（常時約1,000名）の職歴情報を知ることができます．これはすでに昭和63年、総合情報処理センターのACOS-6システム上にデータベースを作成しており、この度OUnetを介して研究室からのアクセスが可能になりました．

なお、「諸職交替」についてもこの度パソコンデータベースを作成し、藩政史料データベースとともに公開しています．利用の窓口は参考調査係です．

図書館の入退館についてお願い

中央館では平成6年9月より入退館システムを設置し利用していただいています．本システムは、図書を正規の手続きを経ないで持ち出ししようとするときに作動しますが、まれに図書以外の持ち物に微妙に反応し、誤作動で警報がなるときがあります．図書館では原因の調査と対応策に努力するとともに、利用者の人格の尊厳を十分配慮し、適切に対応するよう心がけておりますが、利用者に不愉快な思いをさせることが少なからずあると考えられます．

事情をご理解のうえ利用していただくようお願いいたします．

会議

◆学外

1.18～1.19　国立大学附属図書館事務部長会議（於長崎厚生年金会館）
- 日曜日等時間外開館サービス拡大の今後のありかたについて
- 遡及入力の推進について
- ネットワークを利用した図書館間の協力態勢について
- その他

◆学内

12.14　平成６年度第４回附属図書館広報委員会
- 館報「楷」No.21の編集について

12.16　平成６年度第２回附属図書館運営委員会
- 平成８年度歳出概算要求事項について
- 平成８年度国立学校施設整備費概算要求事項について
- 附属図書館中央館備付自然科学系図書資料選定小委員会について
- 附属図書館運営委員会内各種小委員会組織等の一部改正について
- 岡山大学附属図書館利用規程の一部改正について
- 図書館資料整備について
- その他

2.22　平成６年度第５回附属図書館広報委員会
- 館報「楷」No.21の編集について
- 館報「楷」No.22の編集方針について
- 利用案内等について
- その他

2.24　平成７年度図書資料（大型コレクション）収書計画に関する小委員会

2.24　平成７年度附属図書館中央館備付け自然科学系図書資料（本省提出）収書計画に関する選定小委員会

3.16　平成６年度第３回附属図書館運営委員会
- 図書館資料整備について
- その他

編集委員会から

謹んで阪神大震災の被災地の皆様にお見舞申し上げます．岡山でも昭和43年以来27年ぶりの震度４を記録しました．当館では幸いなことに、書架の上段にあった不安定な図書がパラパラ落下した程度でした．被災した大学生の方には貸出サービスなどの支援を行っています．

本号では館長、分館長に図書館の現状と課題について提言していただきました．また、CD-ROMサーバーシステムを利用されている教官の方に寄稿をお願いし、現時点でのサーバーシステムの問題点、学内の協力体制づくりやインターネットに関する提案等をいただきました．図書館員としてこれに応えられるよう努力していきたいと思います．

岡山大学附属図書館報「楷」　No.21　平成７年３月24日
発行人　森岡祐二　編集　広報委員会　表紙デザイン・レイアウト　清水國夫
岡山大学附属図書館発行　〒700　岡山市津島中三丁目１－１　電話086-252-1111